

指導と評価の年間計画・評価規準の作成について

2 地理歴史

<目次>

I	「指導と評価の年間計画」及び「評価規準と単元計画」の作成の手引き	P 1～2
II	「指導と評価の年間計画」（日本史B）＜例＞	P 3～4
III	「評価規準と単元計画」（日本史B）＜例＞	P 5～6
IV	「学習指導案」（日本史B）＜例＞	P 7

I 「指導と評価の年間計画」及び「評価規準と単元計画」の作成の手引き

1 「指導と評価の年間計画」について

これは、次の2の「評価規準と単元計画」の全単元について、その概要を記述したものである。生徒の学習活動に対するより適正な評価、及び生徒の学習の改善に生かされる評価（指導と評価の一体化）の実現を目指して作成する。

これまで作られてきた指導計画は、多くの場合、学習内容（指導内容）を単に1年間の授業時間数に対して配分しただけに留まっていたが、この「指導と評価の年間計画」では、「学習項目」、「授業時間数」、各授業ごとの「主な学習活動（指導内容）」と評価のポイント、「評価方法」を記述する。

2 「評価規準と単元計画」について

学習指導要領に基づく「評価規準と単元計画」は、言い換えれば、評価規準を盛り込んだ「単元ごとの指導と評価の計画」である。次の内容構成で作成する。

◎「単元名」、「単元の目標」、「単元の評価規準」、「指導と評価の計画（○時間）」を示す。なお、「単元」とは、ほとんどの教科書の「節」に該当するものである。

- ・「単元の目標」

実際の使用教科書等に基づいた授業の進度に沿って単元ごとに示した目標。学習指導要領の項目ごとのねらいをもとに記載する。

- ・「単元の評価規準」

単元ごとに4観点別に示した評価規準。「内容のまとまりごとの評価規準」を単元の内容に即して具体化したもの。

◎「指導と評価の計画（○時間）」を示す。そこには、「次程」、「学習活動」、「評価の観点」、「評価規準等」を示す。

- ・「学習活動」、「評価の観点」

上記の1の「指導と評価の年間計画」の「各授業ごとの主な学習活動（指導内容）」と評価のポイント」に反映されていなければならない。

- ・「評価の観点」

「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「資料活用の技能」及び「知識・理解」に評価の観点を整理し、各教科等の特性に応じて、適切に設定しなければならない。

- ・「評価規準等」

評価規準は、「目標」を具体化したものであり、目標が生徒の学習状況として実現された状況を具体的に想定して示す。

- ・「評価方法」

評価方法については、各学校で各教科・科目の学習活動の特質、評価の観点や評価規準、評価の場面や生徒の発達の段階に応じて、観察、生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、ペーパーテスト、質問紙、面接などの様々な評価方法の中から、その場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択していく。

※平成24年3月に、国立教育政策研究所教育課程研究センターから、「評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 地理歴史）」が示され、次のURLからダウンロードすることができる。

http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/02_kou_tirerekishi.pdf

「評価規準と単元計画」＜例＞

(1) 単元名：○○○○

(2) 単元の目標

ア ○○○○○○○○○

イ ○○○○○○○○○

ウ ○○○○○○○○○

エ ○○○○○○○○○

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用 of 技能	知識・理解
・ ○○○○○○○○ ・ 末尾の表現 (例)「～に対する関心と課題意識を高めている。」 「～について意欲的に追究している。」等	・ ○○○○○○○○ ・ 末尾の表現 (例)「～について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。」等	・ ○○○○○○○○ ・ 末尾の表現 (例)「～から有用な情報を適切に選択している。」 「～を図表などにまとめたりしている。」等	・ ○○○○○○○○ ・ 末尾の表現 (例)「～を理解し、その知識を身に付けている。」等

(4) 指導と評価の計画 (○時間)

曜日	学習活動	関	思	技	知	評価規準等		
第一次 (○時間扱い)	【ねらい】 ○○○○○○○○ ・ 末尾の表現 (例)「～をつかませる。」 「～を捉えさせる。」 「～について理解させる。」 「～を展望させる。」 「～を高めさせる。」 「～について説明させる。」 「～を見いださせる」 「～について考察させる。」 「～を表現させる。」 等					・ 学習活動の主な項目を記載する。	・ 該当する評価の観点に、●を記載する。	・ 評価の規準及び具体的な評価の方法を記載する。
第二次 (○時間扱い)	【ねらい】 ○○○○○○○○							

Ⅱ 「指導と評価の年間計画」（日本史B） <例> その1

第2学年用3単位（第3学年まで継続 計6単位）

到達目標 【学習指導要領】		・我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ、我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。				
到達目標に向けての具体的取組 【指導上の留意点】		・中学校の歴史的分野の学習を踏まえるとともに、我が国の原始・古代から現代に至る歴史の展開を、地理的条件や世界の歴史と関連付けて、政治、経済、社会、文化、国際環境など歴史を構成する要素を総合した幅広い見方で大きく把握させる。 ・歴史的事象に対する興味・関心を高め、主体的な学習態度を育成する。 ・諸資料を活用して、歴史を考察し表現する学習を通史的な学習と関わらせて計画的に実施する。				
月	章	学習項目	時間	主な学習活動(指導内容)と評価のポイント	評価方法	
4	歴史と資料		2	・大仏造立について、「続日本紀」等を題材に、歴史は資料に基づいて叙述されていることなど、歴史を考察する基本的な方法を理解し、歴史への関心を高めるとともに、文化財保護の重要性に気付く。	ワークシート 発表	
	第1章	日本文化のあけぼの 1 文化の始まり	13	・旧石器文化、縄文文化の理解を通して、日本人や日本の文化の原点について考古学的な資料を通して考察する。 ・縄文文化と弥生文化の差異に注目し、農耕の開始によって社会に大きな変化が生じたことを理解する。 ・古墳文化の変遷とヤマト政権の支配体制の形成について、東アジア諸国との関係を含めて理解する。	観察 ワークシート 小テスト レポート	
		2 農耕社会の成立 3 古墳とヤマト政権				
	5	第2章	律令国家の形成 1 飛鳥の朝廷	13	・6世紀から7世紀初頭のヤマト政権の動向や仏教文化について、東アジア世界との関係を踏まえて理解する。 ・唐や新羅など東アジア諸国との関係や国内情勢を踏まえて、律令に基づく国内統治体制の整備に至る過程をまとめ、その背景について考察する。 ・律令に基づく国内統治体制及び奈良時代の政治の動向を理解し、土地政策の変化の背景を資料に基づいて考察する。 ・遣唐使の派遣による諸制度の摂取、国家による仏教の興隆などに着目して、天平文化の国際性とその成立の背景などを考察する。 ・平安初期の政治改革や平安仏教の成立の背景を理解し、地方との貴族社会の変貌について奈良時代の諸制度と比較しながら考察する。	観察 ワークシート 小テスト 定期考査
6	2 律令国家への道 3 平城京の時代 4 天平文化 5 平安王朝の形成					
7	第3章	貴族文化と国風文化 1 摂関政治 2 国風文化 3 地方政治の展開と武士	10			
8	第4章	中世社会の成立 1 院政と平氏の台頭 2 鎌倉幕府の成立 3 武士の社会 4 蒙古襲来と幕府の衰退		12		
9						
10		5 鎌倉文化		・仏教にみられる社会的・思想的な動向や影響を理解し、武士や庶民を題材にした文学や絵巻物などに着目して新しい文化の機運が生まれた背景を考察する。	観察 ワークシート 小テスト 定期考査	
	歴史の解釈		3	・荘園絵図や地図資料を参照して下地中分など土地支配の変化に着目し、その歴史的背景を解釈して、武家権力の伸長という歴史の展開の中に位置付ける。		ワークシート 発表
11	第5章	武家社会の成長 1 室町幕府の成立 2 幕府の衰退と庶民の台頭 3 室町文化 4 戦国大名の登場	12	・中世社会がどのように展開・変貌し、今日とのつながりが深い近世社会の特色が現れてきたかを考察する。 ・地域経済の発展や庶民の台頭等に着目し、日本文化の成立に関心をもつ。 ・城跡などを題材に、地域の政治やそれを産んだ社会の在り方について学ぶ。		観察 ワークシート 小テスト
	第6章	幕藩体制の確立 1 織豊政権 2 桃山文化 3 幕藩体制の成立 4 幕藩社会の構造	13	・ヨーロッパ諸国やアジア各地が相互に交流する世界の動向の中で、我が国が受けた文化的影響やその外交体制の変化について、幕藩体制の形成と関連付けて考察する。 ・以前の文化の担い手と比較して、次第に宗教性が薄まりながら生活文化として定着したことなどの特色に気付く。 ・検地や刀狩、惣無事令などの政策や身分制度の形成が近世の社会の基盤形成に果たした役割を、兵農分離や村落・都市支配の観点から考察するとともに、法・制度による支配秩序の形成という観点から幕藩体制の特徴を考察する。		
					第7章	
1	第8章	幕藩体制の動揺 1 幕政の改革 2 宝暦・天明期の文化 3 幕府の衰退と近代への道 4 化政文化	12	・商品経済の発展や農民層の分解という幕藩体制の構造的変化に着目する。 ・洋学や国学が発達した背景を、この時期の幕藩体制の動揺に着目して考察する。 ・農村工業の発達などにみられる近代工業の芽生え、新たな学問・思想の発達とその社会的な影響寺子屋など庶民教育機関の普及に着目し、近代を準備する新しい要素の形成について考察する。	観察 ワークシート 小テスト 定期考査	
2・3						
						歴史の説明

合計時間数 105

「指導と評価の年間計画」（日本史B） <例> その2

第3学年用3単位（第2学年から継続 計6単位）

※目標と到達目標へ向けての具体的な取組は、第2学年と同じ。

月	章	学習項目	時間	主な学習活動(指導内容)と評価のポイント	評価方法
4	復習 前近代の歴史の概観と近代の芽生え		1	・ 前近代の歴史を概観し、近現代史への導入として、国内外の情勢を整理する。	観察 ワークシート 小テスト 定期考査
	第9章 近代国家の成立	1 開国と幕末の動乱	10	・ 開国によって我が国が国際社会に組み込まれたことにより、統一国家構想が生まれ、尊王攘夷運動や倒幕運動を経て明治維新に至った過程について、欧米諸国がアジアに進出する国際環境を背景に、経済状況や社会の動向と関わらせて考察する。	
5		2 明治維新と富国強兵	13	・ 新政府によって行われた廃藩置県や地租改正など一連の諸改革や富国強兵・殖産興業の諸政策により、中央集権的な近代国家の基礎が形成されたことを理解する。	
		3 立憲国家の成立と日清戦争		・ 新政府が強力な中央集権体制を志向したのに対し、国会開設の要求を契機に自由民権運動が展開するなど国民の間にも政治的関心が高揚したこと、政府が立憲体制を目指し憲法制定に至ったことについて考察する。	
6		4 日露戦争と国際関係	13	・ 国民の対外意識の変化に触れるとともに、アジア近隣諸国民が我が国の対外姿勢をどのように受け止めたかについて、諸資料を基に考察する。	
		5 近代産業の発展		・ 近世以来の教育の普及と就学率の高さが産業の発展を支えていたことや、近代産業の発展を背景に社会問題・労働問題が発生して社会運動が起こったことに着目する。	
7・8		6 近代文化の発達	3	・ 伝統的な文化の上に欧米文化を取り入れて国民的な性格をもつ近代文化が形成されたこと、学問では近代化政策と結び付いた欧米の科学技術の移植と研究が進められ世界的な業績をあげたこと、実証的な学風とともに国家主義的な学問・思想も形成されたことなどに着目する。	ワークシート 発表
	歴史の説明		2	・ 明治政府の身分制改革を題材に、歴史事象には複数の歴史解釈が成り立つことに気づき、複数の解釈についての考えを筋道立てて説明する。	
9	第10章	二つの世界大戦とアジア	13	・ 大衆社会の成立とその背景について、日本全体の産業構造の変化や都市と農村漁村との関係、レコード盤やラジオの普及に見られる情報伝達技術の革新、教育の普及などと関連させながら考察する。	観察 ワークシート 小テスト 定期考査
		1 政党政治の発展と大衆社会の形成		・ 第一次世界大戦が国内の経済・社会に及ぼした影響について、貿易額の急増、大戦中の欧米やアジアの経済との関連に着目して、資本主義の発展とそれによる産業構造の変化や都市人口の増大、労働者の増加や都市中間層の拡大による社会構造の変化などについて考察する。	
		2 第一次世界大戦と日本		・ ヴェルサイユ体制・ワシントン体制など国際的な協調体制、中国・朝鮮ほか世界的な民族運動の高揚、ロシア革命とその影響などに着目して、国際社会における日本の立場や対外政策の変化について考察する。	
		3 ワシントン体制	13	・ 昭和恐慌に対する金解禁や高橋財政などの経済政策に着目し、保護貿易主義の広がりなど世界経済の動向について考察する。	
10		4 恐慌の時代		・ 満州事変や国際連盟脱退など日本の対外政策の推移を、国際環境や国内の状況と関連させて考察する。	
		5 軍部の台頭		・ この戦争が世界の諸国家・諸民族に未曾有の惨禍をもたらし、人類の文化と生活を破壊したことに着目し、平和で民主的な国際社会の実現に努めることの重要性を自覚する。	
		6 第二次世界大戦			
11	第11章	占領下の日本	13	・ 戦後の諸改革が、連合国の対日占領政策に基づくとともに、戦争に対する日本国民の反省を支えられて実施されたものであることに留意する。	観察 ワークシート 小テスト レポート
		1 占領と改革		・ 当時の国際環境下におけるサンフランシスコ平和条約の調印と日米安全保障条約の締結に着目し、連合国による占領が終結した事情と我が国の独立の意義について認識する。	
		2 冷戦の開始と講和			
12	第12章	高度成長の時代	12	・ 独立回復後の国内政治の再編について、55年体制の成立を軸に、その過程について理解する。	観察 ワークシート 小テスト 定期考査
		1 55年体制		・ 戦後の窮乏・荒廃の中での生産再開、財閥解体や農地改革、経済安定政策や朝鮮戦争を背景とした経済復興の過程を、連合国の対日政策に着目して考察する。	
		2 経済復興から高度成長へ			
1・2	第13章	激動する世界と日本	8	・ 経済の国際化が進む中で、先進国としての国際的地位の確立、人々の行動範囲の海外への拡大、国際交流の活発化などが国民生活に与えた影響について考察する。	観察 ワークシート 小テスト
		1 経済大国への道		・ 冷戦終結後の国際社会と国内の社会情勢の変化について、持続可能な発展という観点から考察する。	
		2 冷戦終結と日本社会の動揺			
	歴史の論述		4	・ 社会や集団と個人との関係、世界の中で日本が置かれている立場、それぞれの地域社会がもつ歴史とそこで営まれてきた生活の在り方などについて、社会生活と関わる具体的な主題を生徒自身が設定し、これまでの学習によって身に付けた知識や技能を実際に使って、それに対する回答を発信する。	発表、作品

合計時間数 105

Ⅲ 「評価規準と単元計画」（日本史B） <例>

□単元名：「室町幕府の成立」

□基軸となる問い：

「14世紀の『日本』の動乱の要因は何か？」

□単元の目標：

鎌倉幕府の滅亡から室町幕府の成立過程について、「14世紀の『日本』の動乱」という視点から、「南北朝の動乱が、軍事的には北朝が優位であるにも関わらず、なぜ60年以上も続いたのか」等を考えさせることで、観応の擾乱や半済令などの背景を理解させ、分割相統から単独相統への移行、守護領国制の成立等について考察させる。また、同時期の明や朝鮮の成立、倭寇の活動、琉球の統一等、東アジア世界の情勢に着目させることで、14世紀・15世紀の内外情勢の変化に関心をもたせる。

□単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・歴史事象の推移や変化相互の因果関係に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追及している。	・歴史事象の推移や変化、相互の因果関係を多面的・多角的に考察し、歴史の展開における諸事象の意味や意義を解釈して、その過程や結果を適切に表現している。	・歴史資料を含む諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表にまとめたりしている。	・歴史の展開における諸事象の意味や意義を理解し、その知識を身に付けている。

□指導と評価の計画（4時間）

第1次「鎌倉幕府の滅亡と建武の新政」（1時間）

第2次「南北朝の動乱と東アジア世界」（2時間）

第3次「室町幕府の成立」（1時間）

次 程	学習活動	評価の観点				評価規準等
		関	思	技	知	
第 1 次 （ 1 時 間 扱 い）	《問い》 建武の新政はなぜ短期間で崩壊したのか？ 【ねらい】 諸資料を活用しながら、鎌倉幕府の滅亡から建武の新政に至る経緯を理解させる。また、建武の新政がなぜ短期間で崩壊したのかを、鎌倉幕府の滅亡の背景から考察するよう示唆する。					
	○天皇家の略系図から、後醍醐天皇の討幕計画の背景に、皇位の継承や院政を行う権利、天皇家荘園領の相統等をめぐる対立があることを理解させる。 ○ワークシートで、幕府滅亡の経緯や建武の新政の職制等を整理させる。 ○「二条河原落書」等から建武の新政に対する人々の不満を読み取らせる。				○	・歴史の展開における諸事象の意味や意義を理解し、その知識を身に付けている。 （ワークシート）
第 2 次 （ 2 時 間 扱 い）	《問い》 南北朝の動乱は、北朝が軍事的に優位に関わらず、なぜ長期化したのか？ 【ねらい】 諸資料を活用して、守護の権限の拡大やそれに対抗する国人勢力等の動向、単独相統への移行など、当時の社会や経済の変化を、明や朝鮮の建国等の東アジア世界の動向と対比して考察させ、歴史の展開における諸事象の意味や意義を解釈させる。					
	○南北朝の動乱が、北朝が軍事的に優位にもかかわらず、長期化した理由について、様々な観点から考察させる。 例 ・北朝の内部対立 観応の擾乱 ・分割相統から単独相統への移行に伴う一族内の対立 ・地方武士団の変化 血縁的結合から地縁的結合へ				○	・歴史資料を含む諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表にまとめたりしている。 （ワークシート）

	○諸資料から守護の権限の拡大と、それに対抗する国人勢力の動向について把握し、鎌倉時代の守護からその後の戦国大名へという歴史の展開を展望させる。 ○南北朝の動乱を、明の建国（1368年）、朝鮮の建国（1392年）及び琉球における三山の成立と対立など、14世紀の東アジアの動向と比較させ、政権交代や動乱の背景について考察させる。	○	○			・歴史事象の推移や変化、相互の因果関係を多面的・多角的に考察し、歴史の展開における諸事象の意味や意義を解釈して、その過程や結果を適切に表現している。 (観察、ワークシート) ・歴史事象の推移や変化相互の因果関係に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追及している。
第3次 (1時間扱い)	《問い》 室町幕府の財政基盤はどのような構造になっていたのか？ 【ねらい】 室町幕府の職制、財政基盤及び諸政策（守護大名や朝廷への対応、日明貿易をはじめとした対外政策など）について、これまでの学習を振り返りながら、その特徴をまとめ、その後の影響について考えさせる。					
	○職制 「三管領・四職」を、鎌倉幕府の御内人と御家人、江戸幕府の譜代と外様と比較しながら、説明する。 ○財政基盤 御料所（直轄領）の規模を、豊臣政権、江戸幕府と比較し、京都を中心とした経済活動や日明貿易に収入源を求めなければならなかった状況を考えさせる。	○	○			・歴史事象の推移や変化、相互の因果関係を多面的・多角的に考察し、歴史の展開における諸事象の意味や意義を解釈して、その過程や結果を適切に表現している。

IV 「学習指導案」(日本史B) <例>

教科（科目）	地歴公民（日本史B）	単元名	室町幕府の成立
本時の位置付け	単元 第1次 鎌倉幕府の滅亡と建武の新政（1時間） 第2次 南北朝の動乱と東アジア世界（2時間） … 本時（1時間目） 第3次 室町幕府の成立（1時間）		
本時の主題	諸資料の解釈を通して、守護の権限の拡大やそれに対抗する国人勢力等の動向、単独創造への移行など、当時の社会や経済の変化を理解させる。		
本時の目標	歴史資料を含む諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表にまとめたりしている。 【資料活用の技能】		
過程	指導の内容	学習内容	指導上の留意点・観点別評価
導入	本時の主題とワークシートの作業内容の説明	≪MQ≫ 南北朝の動乱は、北朝が軍事的に優位に関わらず、なぜ長期化したのか？ 本時のMQを提示し、ワークシートの作業手順及び作業内容について説明する。	・事前に4人一組のグループを作成しておく。 ・「MQ」の意味について、次の【作業1】を通して確認するように促す。
展開	グループ学習 ※ワークシートに従って作業を進める。	【作業1】 ・14世紀の出来事について、政治、社会・経済、文化、対外関係等に整理しながら年表にまとめる。 ≪SQ①≫ 武士政権（鎌倉幕府）がなぜ武士勢力（足利高氏、新田義貞、楠木正成 等）により滅ぼされたのか？ 【作業2】 ・MQに対して、各グループで「解答」を作成させる。その際、以下の歴史用語について、検討させる。 観応の擾乱 守護領国制 国人一揆 惣領制の崩壊 etc ≪SQ②≫ 半済令はどのような背景で出されたのか？またその影響は？ ≪SQ③≫ この時期、なぜ惣領制が崩壊していったのか？ 【発表】 ・グループごとに「解答」をまとめさせて、発表させる。その際、史料や教科書、図表等の図やグラフ等を活用して説明させる。 発表は、ホワイトボードにまとめさせる。 ※教師は、発表の要旨を聞き取り、黒板にまとめる。	・14世紀の全体像をつかむため、ここではあまり深入りしない。（中学校レベルの学習の整理） ・「SQ①」は、前時の復習の内容にあたる。前時のMQである「建武の新政はなぜ短期間で崩壊したのか？」をもう一度考えさせる。 ・「守護領国制」などの、高校の教科書で新たに登場した概念についてきちんと理解させる。（グループ内で、他の生徒に説明できるか確かめさせる。） ・「SQ②」は、「守護領国制」を理解する上でのスモールステップとなる質問であり、「SQ③」は、より発展的な内容を求めている。 ○歴史資料を含む諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表にまとめたりしている。 【資料活用の技能】
まとめ	本時のまとめ	【作業3】 ・発表を聞いて、各自で「解答」を作成する。その際、学んだ歴史用語をなるべく使用するように促す。 ・次時の予告 今回は、「14世紀の東アジア」という観点から、中国や朝鮮、琉球においても政権交代や統一政権の成立が進んでいたことをそれぞれ比較しながら考察させる。	・学んだ知識・概念を適切に使用しているか。 ・本時への取組を自己評価させる。 ○ワークシートの提出

※ ○印は、記録に残す評価。